

湖西運動公園内遺跡群
第3次・第4次発掘調査概報

1978・3

静岡県湖西市教育委員会
湖西文化研究協議会

序 文

静岡県の西部に位置する湖西市も、近年開発がいちぢるしく進められております。

市内の丘陵地は埋蔵文化財の密集する地帯として知られております。特に古窯跡は湖西市の丘陵地帯だけでも100か所、172基が知られています。これに未発見のものや、4～5基で群を構成することを考えれば、古墳時代から奈良時代にかけて、この湖西地域が数百基の窯跡が群集する東海地方でも有数の窯業地帯であったことが明らかになっています。

今回、湖西古窯跡群のほぼ中央に位置する湖西市岡崎上ノ原地区に、市民が「働きやすく、住みやすい」新都市計画の一環として湖西運動公園造成工事を進めてきました。ところが、この地区に遺跡が発見され、1975年第1次調査、1976年第2次調査を実施し、それぞれ概報を刊行してきました。

本年度の発掘調査は昭和52年8月から開始しましたが、再葬墓としての土器棺墓や台状墓、さらに、窯業生産品の須恵器搬出の基地であったなど、数々の新しい知見を得ることができ、湖西市の歴史を解明していくうえで貴重な資料を得ることができました。

ここに第3次、第4次の発掘調査概要を報告するにあたり、浜松市立郷土博物館、静岡県教育委員会、湖西文化研究協議会の関係各位のご尽力に対して深い感謝を表わすとともに、今後とも暖かいご援助をお願いいたします。

昭和53年3月

湖西市教育委員会

教育長 牧野 治平

例 言

1. 本書は湖西運動公園内遺跡群の昭和52年度に行われた第3次・第4次発掘調査の概報である。
2. 調査は湖西市立鷺津中学校教諭・嶋竹秋が担当し、本文も執筆した。
3. 本書に掲載した実測図は多くの人々の協力を得ているので、実測者名を挿図のそれぞれの目次に記載した。清書を嶋がした。
4. 図版写真はおもに浜松市立郷土博物館の向坂鋼二・川江秀孝・辰己均氏の撮影によるものである。
5. 調査資料（出土遺物及び図面・写真）はすべて湖西市教育委員会に保管してある。

目 次

I 湖西運動公園内遺跡群の環境	(1)
II 調査の経過	(2)
III 遺 構	(5)
(1) D - 1 地点	(5)
(2) D - 2 地点	(6)
(3) D - 3 地点	(10)
(4) D - 4 地点 (5)D - 5 地点	(13)
(6) D - 7 地点 (7)D - 7 地点 (8)D - 8 地点 (9)D - 9 地点	(14)
IV 出土遺物	(15)
(1) 縄文式土器 (2) 弥生式土器	(15)
(3) 古墳時代の土器	(16)
(4) 奈良時代の土器	(17)
V 小 結	(20)

挿 図 目 次

第 1 図 湖西運動公園内遺跡群附近の地形と主な遺跡(嶋)	(1)
第 2 図 湖西運動公園内遺跡群全体図(嶋)	(4)
第 3 図 D - 1 地点遺構実測図(川江・辰己・佐藤)	(7)
第 4 図 古墳時代溝内土器出土状態実測図(川江・辰己)	(8)
第 5 図 D - 2 地点遺構実測図(川江・佐藤)	(9)
第 6 図 土器棺出土状態実測図(第 2 号棺:嶋, 第 3 号棺:嶋)	(9)
第 7 図 D - 3 地点遺構実測図(嶋)	(11)
第 8 図 土器棺出土状態実測図(第 1 号棺:嶋, 第 4 号棺:嶋) 第 5 号棺:川江, 第 6 号棺:川江)	(12)
第 9 図 第 7 号土器棺出土状態実測図(辰己)	(13)
第 10 図 弥生式土器実測図(川江)	(18)
第 11 図 D - 1 地点古墳時代溝内出土土器実測図(嶋)	(19)
第 12 図 D - 5, D - 7 地点出土土器実測図(嶋)	(19)

図 版 目 次

図版 I	(A)D 地点遠景 (南より)	(23)
	(B)台状墓と D-2 地点遠景 (西より)	(23)
図版 II	(A)台状墓全景 (東より)	(24)
	(B)台状墓主体部 (東より)	(24)
図版 III	(A)第 1 号土器棺出土状態 (西より)	(25)
	(B)D-1 地点古墳時代溝内土器出土状態 (東より)	(25)
図版 IV	(A)D-2 地点溝遺構 (西より)	(26)
	(B)第 2 号土器棺出土状態 (西より)	(26)
図版 V	(A)D-3 地点土器棺出土状態 (東より)	(27)
	(B)D-3 地点遺構 E (東より)	(27)
図版 VI	(A)D-5 地点全景 (北より)	(28)
	(B)D-5 地点土器出土状態 (北より)	(28)
図版 VII	(A)第 3 号土器棺出土状態 (西より)	(29)
	(B)第 4 号土器棺出土状態 (東より)	(29)
図版 VIII	(A)第 5 号土器棺出土状態 (北より)	(30)
	(B)第 6 号土器棺出土状態 (南より)	(30)
図版 IX	(A)第 7 号土器棺出土状態 (南より)	(31)
	(B)第 7 号土器棺出土状態 (西より)	(31)

I 湖西運動公園内遺跡群の環境

湖西運動公園内遺跡群は、静岡県湖西市上ノ原・岡崎・横枕にまたがる標高 45 m 程度の低い丘陵上と、侵蝕谷である水田地帯に分布している。丘陵頂部は愛知県の洪積世台地である高師原や天伯原に続いているのでかなり平坦である。丘陵東端は浜名湖西岸に流れ込む笠子川の形成する沖積地に接する所で小さな侵蝕谷が形成され、屈曲の多い地形を呈している。こうした侵蝕谷の一つが沖積地の東側から西側へ伸びて、丘陵を2分している。南側の丘陵は不二山と呼ばれ古くから縄文時代から弥生時代の土器片が採集されていたが、北側及び西側丘陵上は遺跡として確認されていなかった。



第1図 湖西運動公園内遺跡群付近の地形と主な遺跡

1 湖西運動公園内遺跡群 2 筒川2号窠跡 3 筒川3号窠跡 4 不二山1号墳 5 不二山2号墳 6 伊賀谷1遺跡 7 五反田遺跡 8 市場貝塚 9 中瀬木橋北遺跡 10 市場南遺跡 11 川尻遺跡 12 中村遺跡

この周辺の遺跡として、まず注目されるのは古窯跡である。湖西市から浜名郡新居町にまたがる丘陵斜面に古墳時代から中世の行基焼様式にわたる数多くの古窯跡が知られている。これらの湖西古窯跡群は奈良時代に全盛期をむかえる遠江最大の古窯跡群になっている。湖西運動公園内遺跡群はこの湖西古窯跡群のほぼ中央に位置し、筒川2号窯跡(奈良時代)と筒川3号窯跡(鎌倉時代)が運動公園予定地内に含まれている。

縄文時代の遺跡は後期及び晩期の時期のもので、藤ヶ池、上ノ原Iなどにみられる。ともに台地や丘陵先端部の沖積地に面した地点に存在している。これらの遺跡は隣接する愛知県の渥美半島や豊川流域の貝塚を伴う遺跡に比べて規模も小さく、貧弱な遺跡である。こうした状態は縄文時代後期に浜名湖南部はすでに陸地化しており、貝塚が形成されにくい地形であったことなどの理由によるものと思われる。(註1)

弥生時代になると笠子川、一ノ宮川などの河川が形成した沖積地に接する丘陵縁部や沖積地に中期の遺跡がみられるようになる。伊賀谷1遺跡(註2)、湖西運動公園遺跡群D地点や川尻遺跡は土器棺群による墓地であり、中村遺跡(註3)は中期の集落址として推定される遺跡である。後期になると、沖積地に進出して五反田遺跡、中瀬木南遺跡、市場南遺跡が形成されてくるようになる。しかし、これらの遺跡はしばしば河川の氾濫を受けたもようで、大規模な集落として発展しなかった。

古墳時代では破壊を受けた不二山1号・2号墳が群集墳の形で存在し、運動公園から南西500mの地点には「お経塚」と呼ばれる2基の方墳が知られているのみで、古墳の数は少ない。かなりの水田面積を持ちながら古墳の基数が少ないことは、古墳の築造を許されない人々の存在が想定される。

湖西古窯跡の須恵器生産は第1型式後半の明通り古窯跡(註4)からはじまり、奈良時代に全盛を迎えたことは前述した通りである。こうした古窯跡群に関係するのかわからないが、湖西地方の丘陵頂部や縁部に須恵器と土師器の散布地が認められる。湖西運動公園内遺跡群のB地点・D地点でも多量の須恵器が発見されている。湖西運動公園造成地内の侵蝕谷の谷口近くの水田下から墨書土器が検出されていることを考えあわせれば、窯業生産品の集散地として運動公園内の丘陵を想定することができそうである。

以上、きわめて概略的に周辺の遺跡を記述してきたが、縄文時代から奈良時代までの遺物を出土するこの湖西運動公園内遺跡群は、この地域の歴史を解明するのに重要な遺跡群であるといえそうである。

II 調査の経過

1974年度の湖西運動公園造成工事で丘陵の平坦地や斜面からかなりの須恵器片が採集されたことが、この遺跡発見の端緒になった。

1975年8月に湖西市教育委員会の依頼によって、浜松市立郷土博物館の向坂鋼二・辰己均氏らの踏査が行なわれ、縄文時代晩期から奈良時代までの遺物が採集されたことにより、それぞれの時代の遺構が埋蔵されているのではないかと推定した。そこで、湖西運動公園予定地内の遺跡を「湖西運動公園内遺跡群」と命名し、地形によって地区分けをした。谷間の水田地帯をC地区、水田北側丘陵をA地区、西側丘陵をB地区、南側丘陵をD地区とした。

踏査結果に基づいて、関係者が協議し、運動公園造成計画に従って順次年度工事予定地内を事前に発掘調査をすることにした。すでに、B地区に於ては工事が半ば以上進行していたが、嶋が担当者となり、第1次調査(1975年12月14日～12月25日)と第2次調査(1976年7月9日～8月14日)を実施して、概報を発行した(註5)。

調査結果の概要を次に記しておこう。

第1次調査(B地区・1975年)

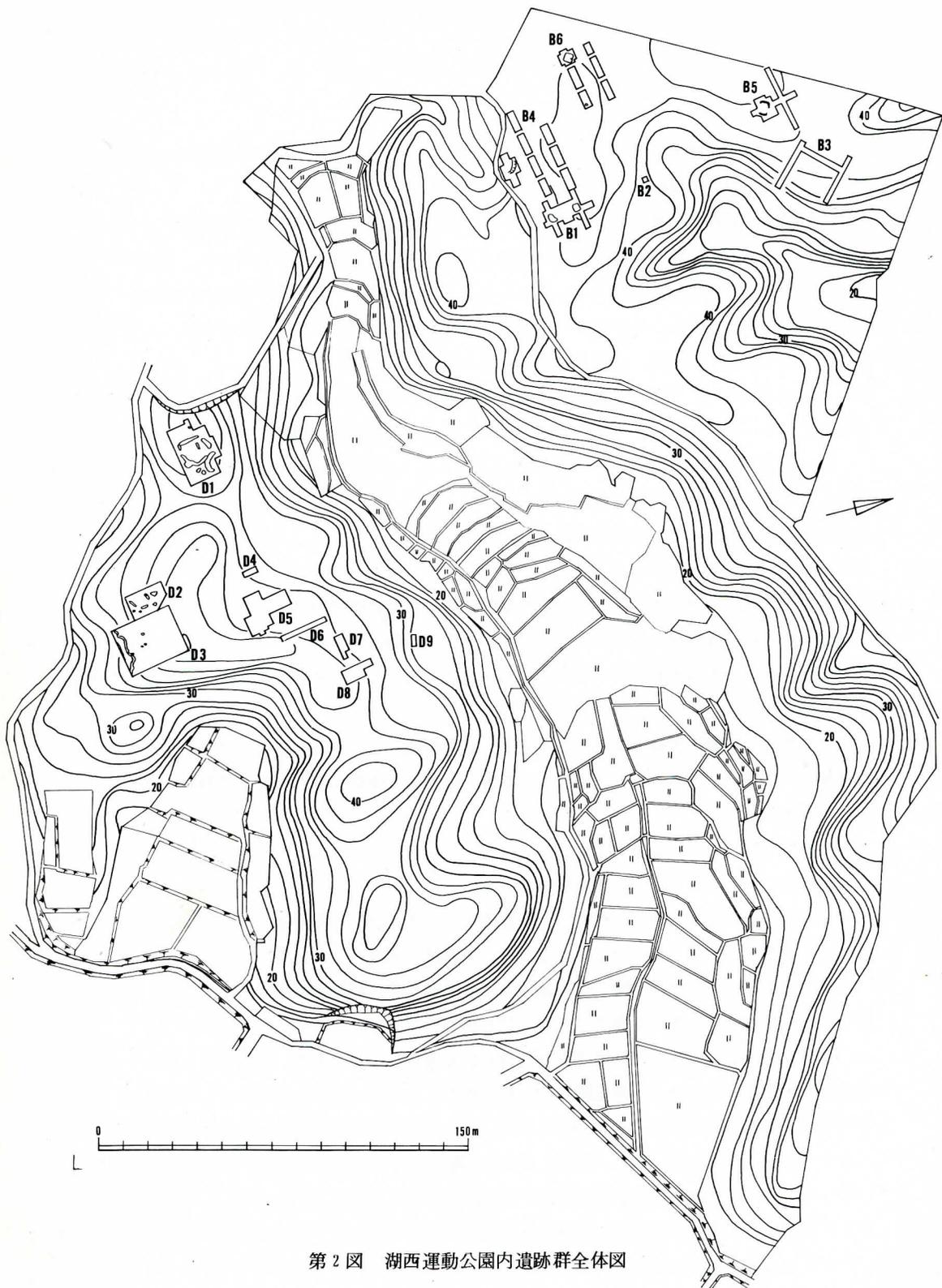
- ① 頂部平坦地から、焼土や柱穴のない小形堅穴の第1号住居跡が検出された。
- ② 頂部平坦地の南側斜面に、テラス状につくられた平坦地がみられ、そこから不整形の浅い堀り込みが発見された。灰白色粘土ブロックや甕形土器片の出土から作業場(工房址?)ではないかと推定した遺構である。
- ③ 出土遺物は古墳時代後期(Ⅳ期)に始まり、奈良時代のものが量的に最も多かった。遺構もすべて奈良時代に相当し、湖西地方に盛行した窯業と関連した遺跡であったが、詳細については不明なところが多い。

第2次調査(E地区・1976年)

- ① 丘陵平坦地から水神平Ⅱ式の土器棺が検出された。
- ② 丘陵南側斜面の地盤を削り平坦地とした遺構が発見された。土器の出土状態から奈良時代の窯業生産品を選別した作業場跡ではないかと推定した遺構(遺構D)である。
- ③ 奈良時代後半の第2号住居跡と、奈良時代前半の第3号住居跡が検出された。特に、第3号住居跡はかまどが付設されておる堅穴の隅丸方形の形態であった。

1977年7月28日に第3次発掘調査の打合せ会を湖西市役所で開き、調査方法と期日を決定した。今回の調査の対象となったのは南丘陵のD地区である。D地区の丘陵は不二山とも呼称され、南側に笠子川の形成する沖積地を見おろす位置にあり、古くから縄文時代晩期の土器片や弥生時代の土器が出土しているところである。また、踏査によれば丘陵の西端の高まりの部分が古墳ではないかと推定されているので、可能な限り調査面積を広げて遺構の検出に務めることにした。

第3次調査では古墳の可能性がある丘陵西端の頂部(D-1地点)と、最も高い丘陵頂部の西側斜面(D-2地点)を重点的に調査することにし、1977年8月1日から8月31日まで延べ23日間を



第 2 図 湖西運動公園内遺跡群全体図

これに当てた。

D-1 地点からは弥生時代中期の土器棺墓 1 箇所、弥生時代後期の方形台状墓、土壇 2 箇所、古墳時代後期の土器群が溝内より検出された。D-2 地点からは弥生時代中期の土器棺墓 2 箇所と数条の溝が検出された。調査面積は 463 m²である。

第 3 次調査終了後、昭和 52 年度運動公園造成工事に追加予算が決定され、再び第 4 次調査を実施することになった。

第 4 次調査では弥生時代土器棺が埋葬されている可能性の強い丘陵頂部の南斜面 (D-3 地点) の全面と、尾根の北側斜面に須恵器片が散在している地点の六箇所を調査対象とした。それぞれ、西側から D4~D9 地点と呼称することとし、トレンチを設定して 1977 年 12 月 14 日から 1978 年 2 月 14 日まで、延べ 34 日間実施した。

D-3 地点からは土器棺墓 4 箇所、奈良時代の遺構 1 箇所が検出され、D-5・D-7 地点では須恵器がまとまって多く出土した。調査面積は 848 m²である。

両調査の期間中、いつもながら浜松市立郷土博物館の向坂鋼二・川江秀孝・辰己均氏のご指導と援助を受けた。また、第 3 次調査では立正大学学生佐藤由紀君、第 4 次調査には静大附属浜松中学校教諭寺田義昭氏の協力を得た。

III 遺 構

第 3 次・第 4 次調査は D 地区の 1~9 地点について行ったので、次に地点別の調査の概要を記しておこう。

(1) D-1 地点 (第 3 図)

D 地区の最西端で標高 41.2 m の丘陵頂部を中心とした地点である。

第 1 号土器棺 (第 8 図・図版Ⅲ (A))

丘陵頂部からなだらかな傾斜に移る西側斜面から発見された。土器棺は壺形土器の口縁を北側に向けてやや斜めに置き、別の壺形土器胴部破片を使用して口縁部をふさぐ蓋としていた。本体となる壺形土器を置くために地盤を掘りくぼめ、すっぽり納まるように安置してあった。掘り込みが浅いために地表面に近い壺形土器の部分が破壊されていた。壺形土器内部には黄褐色土層が充満していて、伴出遺物の発見はなかった。

方形台状墓 (第 3 図・図版Ⅱ (A) (B))

標高 41.2 m 程の丘陵頂部の周りに 4 条の溝を掘って、方形台状墓としたものである。

西溝は長さ 9.2 m、最大巾 2.3 m で基盤を掘り込み、最大深さ 3.9 cm を測る。丘陵尾根部を南北に掘り割ったため、溝の南北端は浅くなり、中央部で最も深くなっている。断面はゆるい U 字型である。北溝は長さ 6.8 m、最大巾 2.2 m で丘陵斜面を削って溝としたため、上部斜面からの深さは 5.4 cm を測るが、下部斜面からは 8 cm と浅くなっている。南溝は中央部に切れ目があり、西方溝と東方溝に分かれる。長さ 2 m の西方溝は西溝に接するが、別の溝として意識して掘っている。確認長さ 4.5 m の

東方溝は最大巾1 mで、地盤の掘り込み深さが上部斜面から45 cm、下部斜面から10 cmを測る。断面は浅いU字型を示す。東端のピットは伴出遺物がないのではっきりしないが、溝の形からいって後世に掘り込まれたものであろう。南面に造出し状の溝が検出されたが、溝内部は炭化物を含んでおり、方形台状墓に伴うものかどうか、精査したが確認できなかった。東溝は造営当時に存在したと思われるが、古墳時代の溝が掘られたため破壊され、わずかに痕跡が認められる。方形台状墓の溝は南中央部と北側東西端の3箇所に土橋を残す形態になっているのが特長である。

台状部は丘状になっている。東西12.5 m、南北11.5 mを測る。高さは1.47 mで盛土は存在しなかった。台状部のほぼ中央に検出された主体部は、主軸を東西にとる長方形の土壙で長辺2.51 m、短辺66 cm、基盤の掘り込み深さ31 cmを測る。断面は逆台形で、底部が西方にやや下降していた。副葬品などの遺物は発見されなかった。

台状部に2箇所、溝外に1箇所の焼土が発見された。ピットも台状部に1箇所、溝外に1箇所検出されたが、方形台状墓に伴うものかどうかは不明である。

溝内発見土器は、西溝・南北溝から壺・高坏などの土器片が出土している。最も多く出土したのが西溝である。小形碗形土器(第10図1)と小形埴形土器(第10図2)が西溝底部より少し浮いて出土し、溝底部からは弥生時代後期前半の高坏が出土した。出土土器から方形台状墓は寄道式土器の時期に営まれたと考えられる。

第1号土壙(第3図)

方形台状墓外の南東部から検出された。長軸を北西に向ける楕円形で長径2.2 m、短径2.0 m、基盤の掘り込み深さ40 cmを測る。断面は長軸がゆるい放物線を描き、短軸は逆台形を示す。土壙南東上部にはよく焼けた粘土ブロックがみられ、底部からも検出された。土壙内斜面には焼土が認められないので、土壙が掘られた状態で焼土がつくられ、その一部が土壙内に落ち込んだものと思われる。土壙内部には炭化物を含む黒色有機土層が堆積していた。出土遺物は弥生式土器3片のみで時期は不明である。

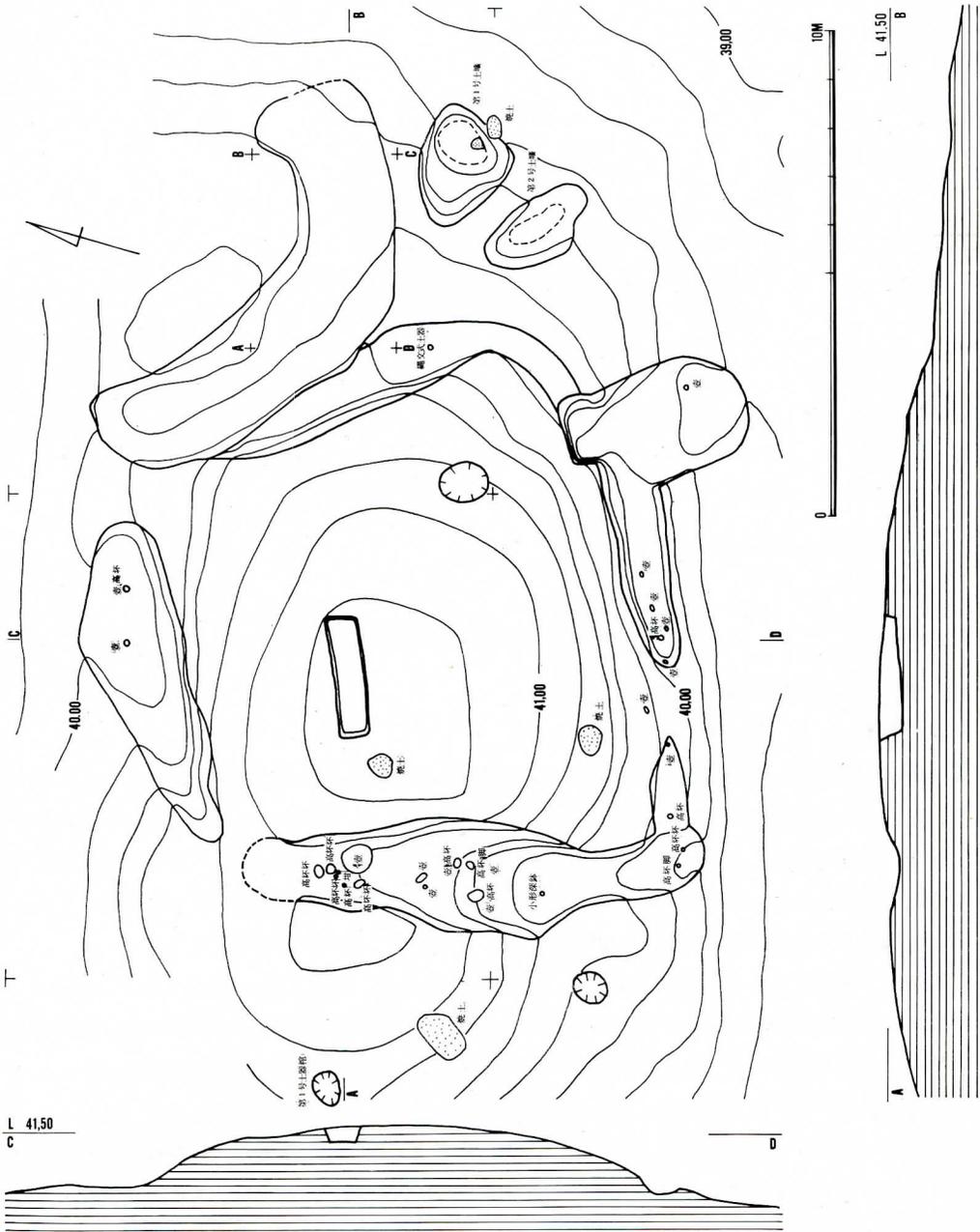
第2号土壙(第3図)

第1号土壙の南側に長軸を北西に向ける長楕円形の土壙が検出された。長径2.35 m、短径1.3 m、基盤掘り込み最大深さ57 cmを測る。断面はゆるいU字型で底部は平坦である。土壙内部には炭化物を含む黒色有機土層が堆積していたが、遺物は発見されなかった。

古墳時代の溝状遺構(第3図・第4図)

方形台状墓の東溝にそって東側から北西に約10 m延びる巾2 mの溝が検出された。深さは北西端で6 cmと浅く、東側に向うにつれて深くなり東端近くで最大深さ73 cmになる。断面は舟底形で底部は平坦になっている。溝内から古墳時代須恵器が大量に検出された。出土状態を第4図に図示した。坏身・坏蓋・高坏・長頸壺・甕・土師器甕などの各種器形がある。所属時期は古墳時代末の7世紀中葉に求められるものである。これらの遺物は完形品は少なく、破損しているもの、焼成不良品などが大部分であることから、溝内に投棄したものと思われる。

(2) D-2地点(第5図)



第 3 图 D-1 地点遺構実測図



第4図 古墳時代溝内土器出土状態実測図

南に張りだした丘陵頂部の西側斜面である。

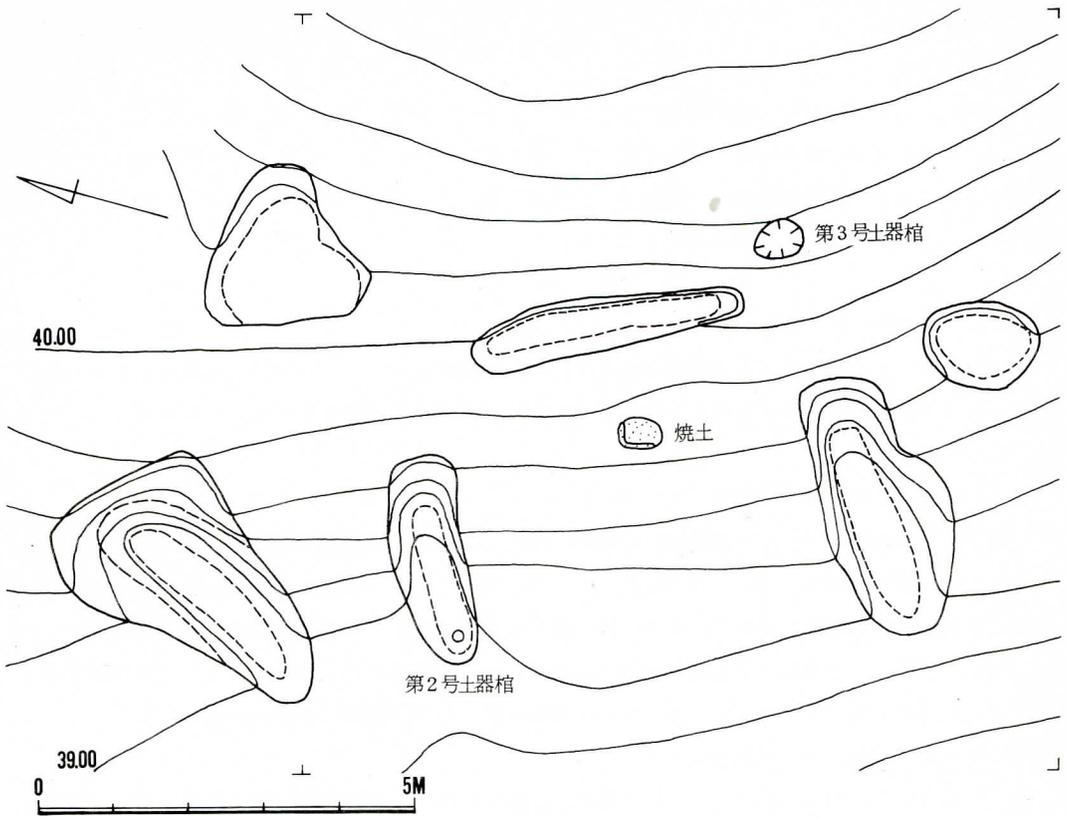
溝状遺構とピット（第5図・図版Ⅳ（A））

粘土壁が一部残存している焼土を囲んで3条の細長い溝が検出された。東溝は長さ3.6 m、最大巾0.74 m、深さ上部斜面から38 cmである。南溝は長さ3.35 m、最大巾1.7 m、深さ48 cmから29 cmである。北溝は長さ2.9 m、最大巾0.94 m、最も深い部分で34 cmになる。これらの溝はそれぞれ単独のものであるかも知れないが、溝の形態と位置関係を考えるとコの字形の方形周溝にも考えられる。北溝から弥生時代中期の壺が1個体出土しているので、その時期の溝としてよい。

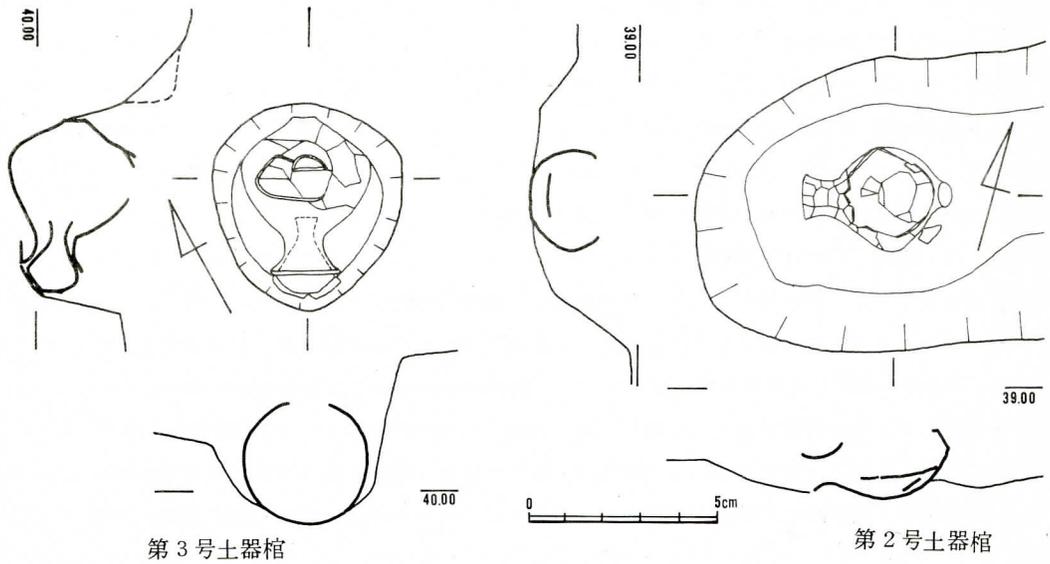
北寄りの土壇状ピットは長軸長さ3.8 m、最大巾2.38 mで、深さ60 cmから32 cmをはかる。土壇上部より奈良朝様式の須恵器が、溝内から弥生式土器片が出土したが少破片であるので、時期は不明である。その他2箇所にピットが検出されたが、遺物が出土しないので、時期は不明である。

第2号土器棺（第6図・図版Ⅳ（B））

コの字形の北溝から単独で出土したものである。深さ26 cmの溝の西端近くに口縁部を溝に沿って西側に向けて置いてあった。土器棺の壺形土器を置くのに溝を掘り込まずに、そのまま安置していた。地表面に近い壺形土器胴部が破損していたが、ほぼ完形に近い形での出土である。壺形土器内部から遺物は検出されなかった。他の土器棺は本体の壺形土器と口を蓋するための別の壺形土器と、少なくとも2個体が同時に検出されているので、本例のような単独出土は土器棺でないかも知れない。



第5图 D-2地点遺構実測図



第6图 土器棺出土状态实测图

第3号土器棺(第6図・図版Ⅶ(A))

最大深さ40cmの楕円形に地盤を掘り込んで、その中に土器棺の壺形土器口縁部をほぼ南に向けて置き、別の小形壺形土器を本体に入れ子状にして蓋に使用していた。さらに小形壺形土器が安定するように3個目の壺形土器胴部破片を使用して、底部に敷いていた。3個体の壺形土器を使用していたのである。土器棺内部から遺物は検出されなかった。

(3) D-3地点(第7図)

南に張りだした丘陵頂部から南斜面全体の500㎡の面積にわたって、土器棺を検出するために設定した地点である。第4号土器棺から第7号土器棺と、傾斜面の地盤を削り取って平坦地をつくる遺構が検出された。

第4号土器棺(第8図・図版Ⅶ(B))

丘陵南傾斜面の標高38mの中腹部から検出された、地盤を上部傾斜面から約70cm掘り込んで、土器棺がすっぽりと納まるように楕円形にしている。長軸85cm、短軸60cmである。土器棺本体は大形の壺形土器で口縁部を北向きに置き、別の壺形土器胴部破片で口縁部に蓋をし、本体胴部にもかぶせていたようで、土器棺内部に破片が落ち込んでいた。地盤掘り込みが深いので、土器棺は破壊をまぬがれ、完形に近い形での出土であった。土器棺内部から伴出遺物は検出されなかった。

第5号土器棺(第8図・図版Ⅷ(A))

第4号土器棺の東側で、標高37.4mの地点から検出された。土器棺は大形の壺形土器の口縁部を東向きにして、水平になるように置き、口縁部に別の壺形土器胴部破片を蓋として使用していた。土器棺を置くために地盤を長軸1m、短軸70cmの楕円形に掘り込んでいる。北側上部斜面から約40cmと深く掘っているが、下部斜面から10cmと浅くなっているため、地表面に近い壺形土器の部分は欠損していた。土器棺上部褐色土層中より約10cm大の円礫が検出されたが、土器棺に伴うものかは不明である。土器棺内部より遺物は検出されなかった。

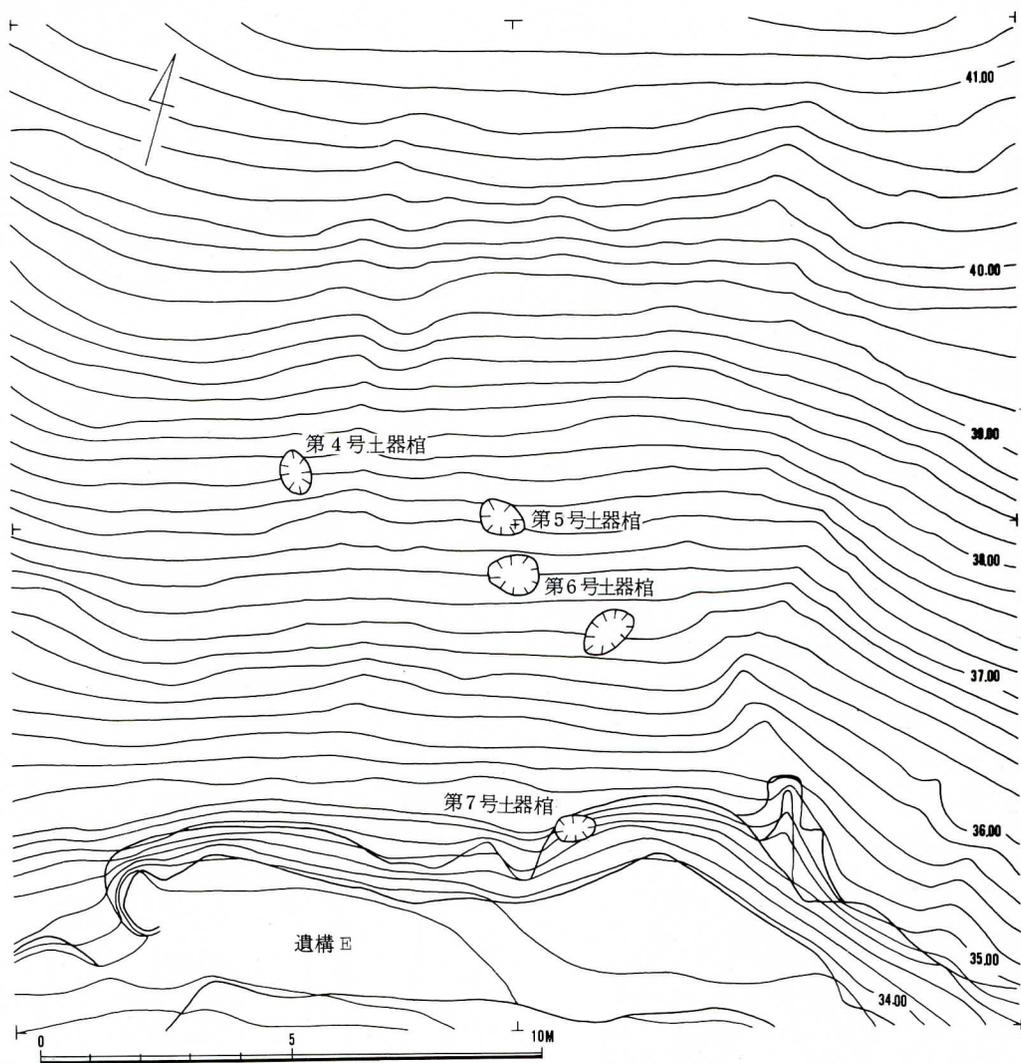
第6号土器棺(第8図・図版Ⅷ(B))

第5号土器棺の南側2mの地点に検出されたものである。土器棺を置くために上部斜面から約30cmと掘り込んでいるが、下部斜面では15cmと浅くなっている。このために土器棺のほとんどが欠失しており、わずかに胴部の一部が地盤より浮いて残存しただけである。

第7号土器棺(第9図・図版Ⅸ(A)(B))

第4号土器棺から第6号土器棺までの中腹部から検出されたグループより、一段下がった標高34.6mの地点で、遺構Eの斜面より検出された。土器棺の本体である壺形土器の口縁を東向きに置き、別の壺形土器の口縁部を本体の胴部に伏せてあり、胴部破片は本体の口縁部の蓋に使用していた。土器棺を安置するために地盤を掘り、長軸83cm、短軸57cmの楕円形にし、上部斜面から約80cmと深く掘り込んでいた。土器棺内部からは胴部が欠落した破片が検出されたほか、何も発見されなかった。

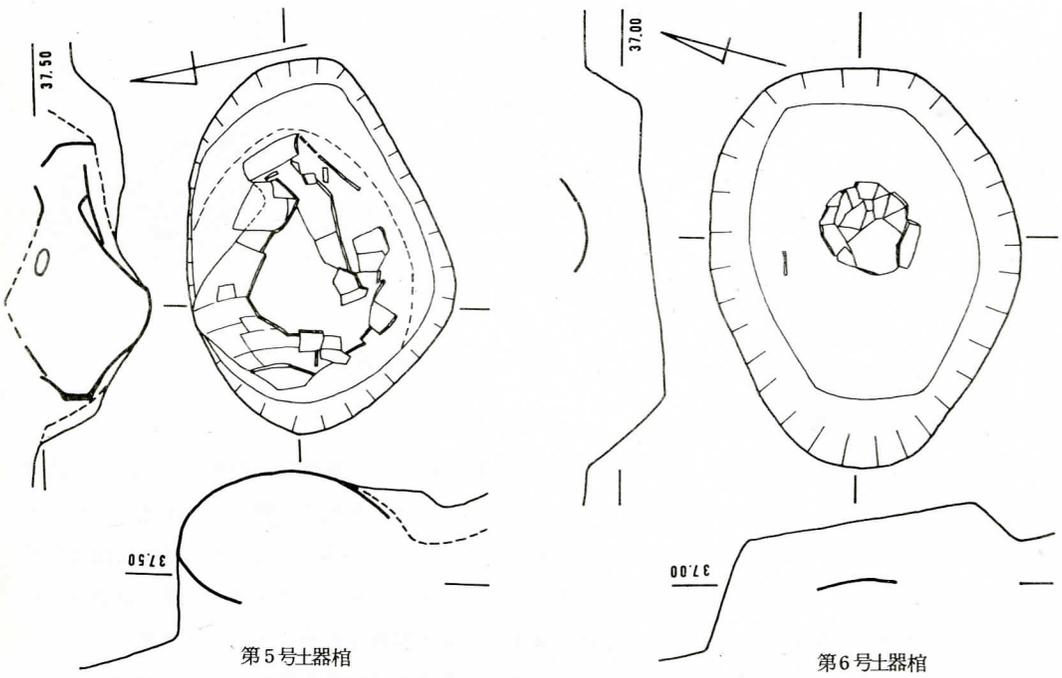
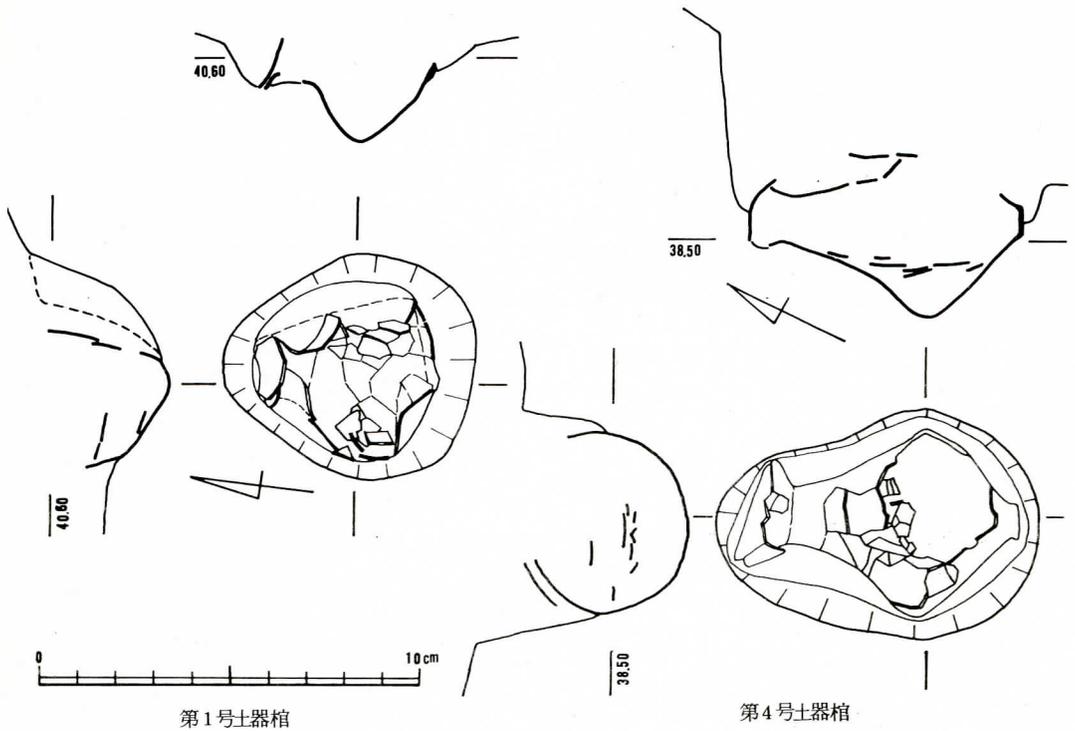
他に土壌が1箇所検出された。土器片が3片発見されたのみであるが、土壌の形態からみて土器棺墓と思われる。



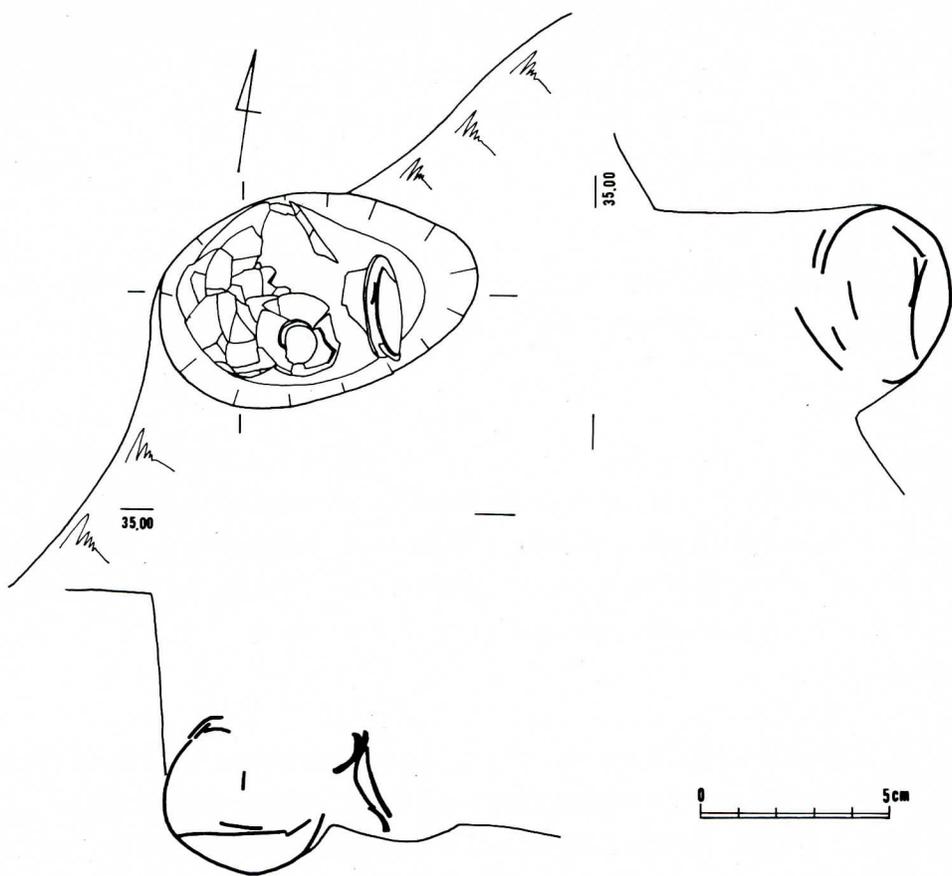
第7図 D-3 地点遺構実測図

遺構E (第7図・図版V(B))

丘陵中腹部のやや下方の標高34.6m附近から地盤を削り取って、南面に平坦地をつくっている遺構である。この平坦地は平均巾2mあり、4地点に奈良時代の坏、長頸壺、甕などの須恵器片や土師器甕形土器が出土した。中央部では焼土や土製支脚が検出された。土器片の出土する地点は炭化物が混入する褐色土層になっていた。このような遺構のあり方や出土遺物から考えると、第2次調査での検出例である遺構Dと類似する。ともに、窯業生産品である土器類を選別するような作業が行なわれたのではないかと思わせる遺構である。なお、この地点は冬季の北西季節風が吹いても風があたらない暖かい場所であることを付け加えておく。



第8图 土器棺出土状态实测图



第9図 第7号土器棺出土状態実測図

(4) D-4 地点

D-3 地点の丘陵頂部の北側斜面でわずかな平坦地に移行する地点に $2\text{ m} \times 6\text{ m}$ のトレンチを設定して調査したが、奈良時代の須恵器片が数十点出土したのみで、遺構は検出されなかった。出土した遺物は投棄された須恵器片と思われる。

(5) D-5 地点 (図版Ⅵ(A)(B))

D-4 地点の 20 m 東側で、丘陵を侵蝕する谷頭の尾根に近い地点である。この付近は尾根より少し下がった所に半円形の平坦地が認められたが、人為的に作られたものでなく自然地形であった。奈良時代の坏、長頸壺、柑、こしき、甕などの須恵器片と土師器甕などがまとまって出土したが、完形品は少なく、焼成によって変形したり、破損しているものが多い。尾根近くにあたかも捨てられたような出土状態であった。谷の下方でも多くの須恵器片が出土しているので、尾根近くから投棄したものと思われる。谷頭の土層は、表土層下に黄褐色土層が、その下層に黒褐色土層が堆積していた。遺構は認められなかった。しかし、焼土や炭化物、及び土製支脚が検出された。このような出土状態や遺物のあり方は、前述した遺構Eと類似している。谷間の埋土であったので柱穴などは確認されな

ったが、尾根近くに簡単な小屋掛けとかまどを造り、窯業生産品である須恵器を選別して不良品を投棄したのではないと思われる。この地点は冬季に北西季節風がまともに吹きつける場所であって、とても作業場には適さない。逆に、夏季には尾根近くであるので風も当り、しのぎやすい場所である。季節によって作業場が移り変わるのであろう。

(6) D-6 地点

尾根から北側斜面に巾2 m、長さ20 mのトレンチを設定して調査した。表土層がうすく、地盤の赤褐色細礫層にすぐ達し、遺構は検出されなかった。奈良時代の須恵器片が少量出土したのみである。

(7) D-7 地点

谷間の窪地に巾2 m、長さ10 mのトレンチと、さらに谷側へ巾2 m、長さ7 mの拡張区を設定して調査した。遺構は検出されなかったが、土器が多量に出土した。奈良時代須恵器を中心にして、条痕文土器、古墳時代Ⅳ期の須恵器、土師器甕などが検出された。完形品は少なく、破損したものが多数を占めていた。この地点は遺構Eなどのように斜面を削り取って平坦地としたような場所がみられなかったので、単に不良品を谷間に投棄した所ではないかと考えられる。

(8) D-8 地点

調査前には小高い盛土を思わせる所であったので、トレンチ調査を実施した。丘陵尾根から北側傾斜面に移行する地点で、地盤である赤褐色土層をわずかに削り、平坦地とした遺構が検出された。遺構Fと称することにする。平坦地は北側に広がっていたが、柱穴などのピットは発見されなかった。地盤を削った斜面から、こしき、坏、甕などの奈良時代須恵器が検出されたが、量的には少なかった。遺構Eと類似しているが、規模が小さい。

(9) D-9 地点

D-8 地点の北側斜面に一段と低くなった所に、平坦地が存在した。ここに巾2 m、長さ5 mのトレンチを設定して調査したが、表土からすぐ地盤の赤褐色土層に達し、遺構は検出されなかった。こうした地点でも奈良時代須恵器片が十数点出土した。

以上、第3次・第4次調査の遺構の概要を述べた。現段階までの知見によれば、別に遺構が存在しない所でも須恵器片が検出されるので、湖西運動公園予定地内の丘陵全面に須恵器片が散布しているものと思われる。

IV 出土遺物

第3次・第4次調査によって得た遺物は、縄文時代・弥生時代・古墳時代・奈良時代の4時代にわたっている。特に弥生時代中期の土器棺が7箇所に見出されたことは、遠江地方の弥生時代墓制ならびに弥生式土器編年に貴重な資料を提供するものと思われる。

今回の調査で整理箱に20箱分の資料を得た。大部分が奈良時代の須恵器で、次に弥生式土器、古墳時代須恵器の順序の量である。縄文式土器も少量出土した。現在整理中であるので、それらのうち主なものを図示した。

(1) 縄文式土器

台状墓の東溝斜面から胴部破片の一部が出土した。深鉢形土器で孤線を描く沈線がみられ、瀬戸内沿岸地域の縄文時代後期中津式土器に類似するものと思われる。

(2) 弥生式土器(第10図)

○中期前葉の土器

鉢形土器と思われる小破片がD-7地点から出土している。器面に繊細な条痕が斜めに施され、口縁内面に櫛状具による波状文がみられる。水神平Ⅲ式に該当するであろう。

○中期後葉の土器

すべて土器棺に利用された壺形土器である。

第1号土器棺壺 口縁部が受口になり、頸部から口縁部にかけて櫛状器具によるはね上げ文が施される。頸部から胴部にかけては、細い横線文、波長の短い波状文がめぐり、その下に2本一組の沈線を縦位に引いて区画をする。その区画内に波状文を縦に施し、下段には4本の沈線を横位に引いて区切る。区切られた下部には、さらに櫛状器具で両端部に縦線を引く。こうした文様帯の間には、1本の縦位の沈線を2本引いて区画した中に、短い横線を粗く巾広く引き、その上に斜線を5本施している。こうした2種類の文様帯が相互に肩部から胴部をめぐっている複雑な文様である。蓋に利用された壺形土器は、胴部に波状文をめぐらしている。

第2号土器棺壺 口径12.3cm、高さ35.6cm、胴最大径29.5cmである。細い刷毛目が器面全体にみられる。下胴部に長径9.4cm、短径7.2cmの孔が焼成後穿がたれている。

第3号土器棺壺 第10図3は本体である壺形土器である。口径18.4cm、器高41.1cm、胴最大径33.8cmである。色調は全般的に灰褐色を呈し、部分的に黒斑がみられる。ヘラ研磨した部分は光沢もあり硬いが、大半は風化が著しい。外反した口唇部を折り返している。頸部は刷毛による縦方向の整形がみられ、球形の下胴部にも横走するヘラ整形痕が認められる。肩部から胴部にかけて、櫛状器具による横線文が4段にめぐり、縦位2条1組の波状文が全周で3ヶ所に施文している。土器内面には粘土を貼付した後の指圧痕が4段に付けられている。5は土器棺壺の本体に入れ子状に蓋として使用した小形壺である。口径5.9cm、器高19.7cm、胴径15.1cmを測る。器面にわずかに刷毛の痕跡

がのこる。刷毛整形後表面を研磨しているが、風化が著しい。4は小形壺の下部から検出されたもので、胴部約 $\frac{1}{2}$ の復元がなされた。頸部から胴部中ほどまでを縦方向に、それより下部はやや斜方向に刷毛整形をする。この粗い刷毛整形の上面を頸部から胴部中ほどまで横方向に櫛状器具で横線様に施文し、一見格子目状になっている。また、頸部から胴部にかけて櫛状器具で縦方向に波状文を施す。

第4号土器棺壺 口縁部は受口になっており、頸部は細くいちぢく形の胴部下部に稜をつけている大形の細頸壺形土器である。口縁部には横位の刷毛目が施され、そこに竹管文が上下2段と、5箇所に棒状浮文が付く。頸部には刷毛目が斜め方向にはね上げ状に施し、頸部下部には指頭による圧痕が連続してめぐっている。肩部以下は横線文が巾広く施され、その上に5本一組の断続の櫛描き縦線がつく。文様帯下段には扇状文を連続させた下に、櫛状器具で斜め方向に交互に引いて斜格子状にし、それ以下は、横位の刷毛目になっている。蓋の壺形土器は口縁部が欠けているが、器面に刷毛目が施されている。

第5号土器棺壺 口縁部が欠けているが、かなり大形の壺形土器になりそうである。胴部に2段の横線文、その間に波状文が施されている。赤褐色を呈している器面は風化が著しい。蓋に利用した壺形土器は文様のみならず、器面に刷毛目が残る。

第6号土器棺壺 大部分が欠失しており、器形および文様は不明である。

第7号土器棺壺 本体である壺形土器は口縁部が強く外反して、折り返している。胴部は球形になるらしい。口縁部には波状文が、胴部には櫛描き横線文と波状文が交互にくり反される。蓋の壺形土器は口縁部が外反してから立ち上がって、受口状にしている。口縁部に斜格子文が、3段に区切った胴部にも斜格子文が2段に、最下段に鋸歯状文を配する。

以上の土器棺に使用した土器は壺形に限られ、甕形や鉢形はみられない。第1号土器棺の壺形土器は中期後葉でも瓜郷式の系譜を引くやや古い様相を示し、また、第4号土器棺壺は遠江の嶺田式の影響を受けている。他は東三河地方の長床式に比定しうるものであろう。

○後期前半の土器(第10図1・2)

台状墓の溝内から出土したもので、壺形土器と高環形土器がある。壺形土器は小破片が多く、無文が多いようである。高環形土器は坏部の部分が口縁と下底の境界で稜を作り、口縁部が外に開いて盤状の器形をとる。口縁部と稜との間に櫛描波状文がめぐっている。脚部は円柱形で、脚の上半に櫛状器具による横線文や斜位の刺突列を加えている。これらは寄道式、もしくは伊場式土器とされる型式の特長である。その他、手づくねの小形碗形土器(1)や小形埴形土器(2)が出土している。これらは器形からいってやや時期が下がるかも知れない。

(3) 古墳時代の土器(第11図)

台状墓東側の古墳時代溝内より一括して出土した須恵器が主体である。蓋、坏、高環、長頸壺、平瓶、甕などの各種の器形があり、この時期の組成を復元することができるものである。他にD-7地点の出土品が加わる。

須恵器坏身の最大径が10cm~11cmと小形化しており、これらの土器群は遠江須恵器編年第Ⅳ期(註6)にあたる。孝徳天皇の長柄豊碕宮造営にかかわると推定されている整地層から検出されたも

のと同型式であり、645年をあまり下らない7世紀中葉にあたるものとされている(註7)。

蓋 器形から2種類観察された。A類は坏A類とセットをなし、この種のものが多数を占める。Bは長頸壺の蓋である。

A類(1・2) やや半球状を呈し、口径11cm~15cm、器高4.0cm~4.5cmを測る。頂部はヘラ切りをして平坦部をつくる。口径部は内湾している。

B類(13) 口径9.3cmの蓋の下に垂直に近いかえりがつき、頂部に乳頭状のつまみがある。焼成もよく、黄緑色の自然釉が全面に認められる。

坏 器形から2種類がみられる。蓋A類とセットをなすA類と、蓋をもたないB類である。A類が量的に多数を占める。

A類(4~8) 口縁部内側に蓋受けがつく。小形で口径11.8cm~10.6cm、器高3.8cm~4.4cm、立ちあがりの高さ0.5cm前後である。底部はヘラ切りで整形してある。

B類(9・14・15) 半球状の器形で口縁部がやや湾曲するものと外反するものがある。14は口径11.3cm、器高5.8cmを測り、蓋A類より深くなる。15は口径が大きく14cm、器高6.2cmである。胴部上位を削り、段をつくっている。9は小形で口縁部が外反し、内面には黄緑色の自然釉がかかっている。

甗(10~12) 形態から口縁がやや外反するもの(11)と直立するもの(10・12)に細別される。いずれも小形で口径8.5cm~9.5cm、器高5cm~5.4cmである。胴部から口縁部へと直立する所で削り出しをして、稜をつくり、胴部中位に1条から2条の沈線をめぐらす。口縁内面にも1条の沈線が引かれるもの(10)もある。底部はヘラ削りをうけている。D-7地点から出土した第12図7もこの時期のものであろう。

高坏(16) 無蓋で短い脚に深みのある坏部につく形態である。坏部は底部外面ヘラ削りの他、外面横ナデ調整をする。脚部は厚く外へ大きく開くが裾部を欠く。

小形埴(第12図5) D-7地点から出土したものである。口縁部が極端に短い。胴部はほぼ中央部で最大径を有する。底部外面はヘラ削りが施されているが、雑に整形している。器形も焼成時に変形したものである。奈良時代に該当するかも知れない。

(4)奈良時代の土器 (第12図)

D-5地点を中心とした出土遺物の大部分がこの時期のものであり、土師器甕形土器をのぞいてすべてが須恵器である。これらの須恵器群は遠江須恵器編年第V期に相当し、前半は7世紀末から8世紀前葉にあたり、後半は8世紀中葉から後葉で、中葉に中心をおくものであろう。

○前半の須恵器

坏身(3) 扁平な坏で平底に高台を付けるが、底部が高台よりはみ出る丸味のある底になっている。口径14cm、器高4cmである。

甗(6) 古墳時代後期の甗よりも口径が大きくなり、口径12.9cm、器高5.7cmを測る。口縁部が外反する。

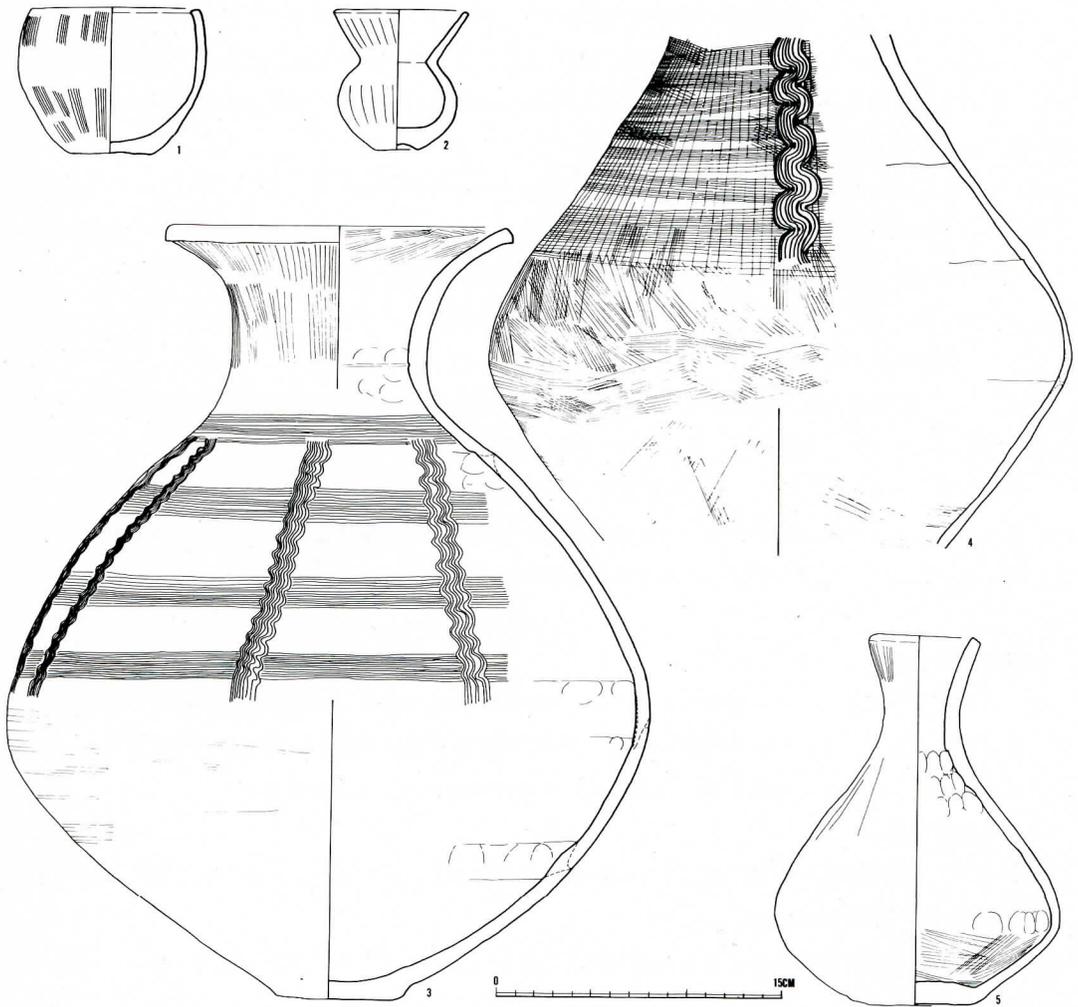
○後半の須恵器

坏身(2・4) 平底に高台を付け、底部が高台よりはみ出ないもの(2)と、ヘラ切りされた丸底の半球形をなす器形であるが、底面が大きくなっており、口縁部を外反させているもの(4)がある。

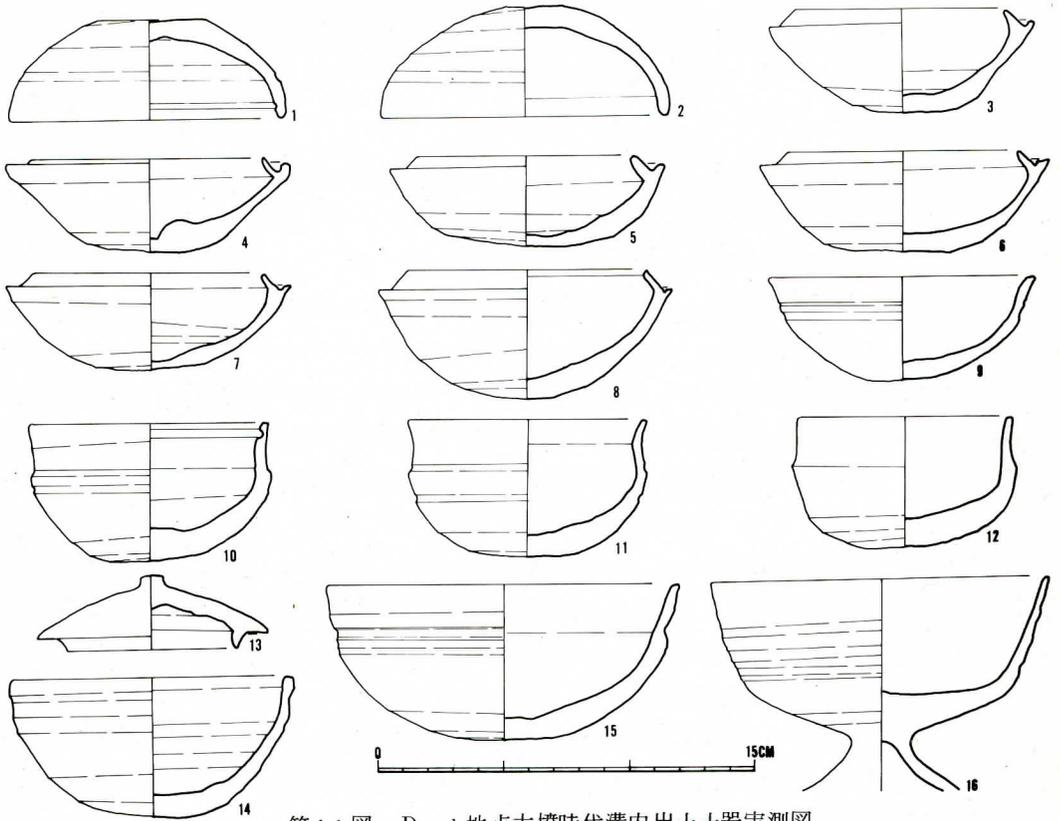
坏蓋(1) 扁平の宝珠状のつまみを付けた蓋で、つまみ部から口縁部にかけてゆるやかな曲線を描き折り込むように屈折させたものである。

小形長頸壺(11) 肩の張った扁球形の胴部に細長い口頸部がつく。この時期のものと思われる。

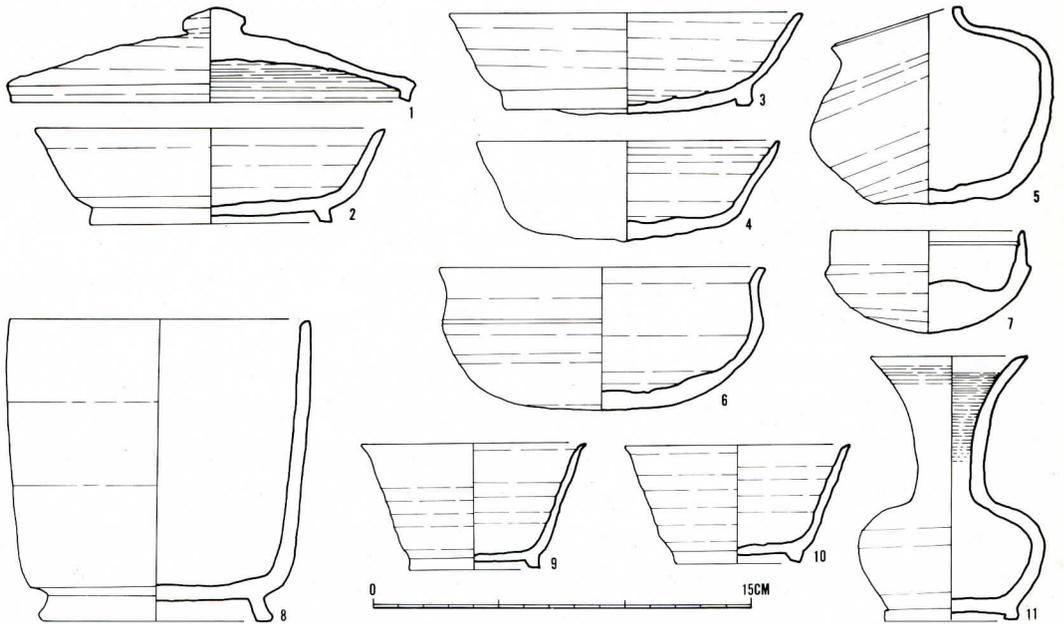
鉢形土器(8・9・10) 9と10はともに口径8cm、器高4.7cm~5cmである。焼成がよく内面の一部に黄褐色の自然釉がかかっている。器面の内外にノタ目痕が残る。底部はヘラ切りで高台が付く。平安時代初頭まで降るかも知れない。8は口径12cm、器高12cmを測る。円筒形の特長ある器形で、湖西地方での初見である。高台は外反し、底部は水平になっている。



第10図 弥生式土器実測図



第 11 图 D-1 地点古墳時代溝内出土土器実測図



第 12 图 D-5 地点・D-7 地点出土土器実測図

V 小 結

今回の調査で、本遺跡はまず土器棺墓、台状墓などの弥生時代の墓地としての性格を有する遺跡であることが明らかになった。また、古墳時代から奈良時代にかけては、窯業生産品の集散地であったと推定できたことも大きな成果であった。以下、本遺跡に関する二・三の問題について述べておこう。

第1に、土器棺の墓壙の数が7個、他に不確実なもの1個と調査以前に盗掘された1個を加えると、計9個になる共同墓地であった。土器棺はかつて、小児埋葬用と考えられたこともあるが、最近では一度死者を土葬あるいは風葬によって遺骸が白骨化するのを待ち、ある時期を経て、それらの遺骨を集めて土器の中に入れ、土壙を掘って再びこれを埋葬する再葬墓と推定する説が有力である。これらの土器棺は1個の墓壙に遺骨を納めた壺形土器と、これに蓋をする別の壺形土器もしくは甕形(鉢形)土器が1セットになっているのが通例であるが、本遺跡では、蓋身ともに壺形土器に限られていた。今、これらの土器棺群を細分すれば、台状墓が検出されたD-1地点と、D-2・D-3地点の丘陵斜面の2グループに分かれるようである。土器棺は弥生時代中期後葉の長床式に中心をおくけれども、この2グループ間に時期的な差異があるかどうか、今後土器の復元を待って検討したいと思う。

こうした共同墓地をつくった集落はどこに求めたらよいのだろうか。丘陵裾部には集落址となるような地点がみあたらない。本遺跡より水田地帯を経て、南方に500 m離れた丘陵先端部の中村遺跡に中期の弥生式土器片が検出されているので、一応ここに集落址を求めるべきであろう。集落を離れた丘陵尾根近くに共同墓地が営まれたとみてよいようである。

このような土器棺をもつ遺跡は、遠江地方に於て、湖西市川尻遺跡(註8)、舞阪町白石山遺跡(註9)、雄踏町中簿遺跡(註10)、浜北市芝本第Ⅲ遺跡、磐田市馬坂遺跡、同竹之内原1号墳(註11)、袋井鶴松遺跡、同柳原遺跡(註12)、同地藏谷遺跡など、最近多くの出土例が報告され、その実態が明らかになりつつある。これらのうち、馬坂遺跡、芝本第Ⅲ遺跡は方形周溝墓より発見されたものであり、地藏谷遺跡と竹之内原1号墳は台状墓内より出土したものとされている。その他白石山遺跡、所謂丸窓付土器が出土した中簿遺跡などは単独出土である。これらの土器棺は弥生時代中期中葉から、後期中葉までの期間内で中期後葉に盛行するようである。

さらに視野を広げれば、代表的な遺跡として千葉県天神前遺跡(註13)や群馬県岩櫃山遺跡(註14)などがあげられ、愛知県下でも斉藤嘉彦氏の集成がある(註15)。東海から東日本にかけて普遍的にみられる墓制である。こうした墓制は縄文時代晩期からの遺風であろうとされているが、遠江地方でも縄文時代晩期の雄踏町長者平遺跡(註16)の合口甕棺や弥生時代中期初期の湖西市伊賀谷遺跡、本遺跡のB地点などから土器棺が出土しており、縄文時代晩期からの遺風がたどれるのである。

第2に台状墓の発見である。丘陵頂部を削り出して、墓域を方形に仕上げ、4周に周溝を有している。内部には1個の土壙が存在した。「こうした台状墓は墓制の趣意が方形周溝墓とほとんど同じであるので、それほど峻別する必要がないと思われる」といわれているが(註17)、遠江地方の場合には榛原郡倉見原遺跡(註18)、袋井市地藏谷遺跡、磐田市竹之内原1号墳などに隣接を有し、集落

を離れた丘陵上に単独に占地するなどの特長がみられ、集落内に群集する特長ある方形周溝墓とは異なった様相を示している。本遺跡の場合は、内部主体が疎禿でないことから前記諸遺跡よりも古い形態であると思われる。一応、溝内出土の高坏形土器から弥生時代後期前半の時期を想定したのであるが、溝内出土の土器類をさらに検討し、時期を決定したいと思う。今後、土器棺墓や土壙を含めて、集団墓地から個人墓地への発展過程を、中村遺跡の調査と関連させて考察していく必要がある。

第3に本遺跡内の丘陵平坦部や丘陵斜面に、古墳時代から奈良時代の須恵器片が散布している意味の解明である。すでに、第1次・第2次調査を経て、奈良時代住居跡の検出から須恵器生産に係わる集落址であり、かつ、窯業生産品の選別が行なわれた場所ではなかったかと推定した。今ふたたびこの問題にふれてみよう。

まず、遺跡の立地であるが、古墳時代（I期）からはじまり、奈良時代に最盛期となる湖西古窯跡群のほぼ中心的位置にあたり、水田地帯には条里制の遺構がみられるところである。次に、交通地理の見地からみれば、郷土史家の彦坂良平氏は、古代の東海道は本遺跡近くの市場部落附近を通り、しかも、弘法大師作と伝えられる「遠江浜名淡海図」から、この地に浜名の郡家が置かれたのではないかと推定している（註19）。こうした考えの傍証の一つとして、運動公園内の水田下から墨書土器が出土していることをあげている。

以上の諸点から、湖西運動公園内の須恵器散布状態を考えあわせると、周辺の窯業生産地から須恵器がいったん本遺跡に集められ、伊場遺跡にみられるような自然の水路（笠子川の水利用や浜名湖）を利用して東国へ、あるいは陸路を運んでそれぞれの消費地に供給されたものと考えられる。

D-1地点の古墳時代溝内から出土した須恵器及び土師器は、古墳時代IV期に集中している。しかも、遺物の大半は完形品に近いものであったが、一部にひずみや欠損部分があり、チェック後廃棄された可能性の濃いものである。これらの須恵器は湖西古窯跡群の須恵器と共通性が認められるので、古墳時代後期には少なくとも統制された生産が行なわれたと考えてよからう。こうした傾向は奈良時代でも認められ、遺構D・遺構E・遺構Fのように丘陵斜面を削り平坦地とした所で、須恵器の選別チェックを行なったらしい。しかも、奈良時代には大量の須恵器を扱ったようで、多くの不良品を谷間に投棄したものの中にはひずみや欠損部分が多いことから、さらに統制が強まったものと考えられる。須恵器搬出の基地がこの運動公園予定地内の丘陵地帯にあったと考えるのである。このような須恵器生産地としての古窯跡だけでなく、それに関係した搬出基地としての性格を有する遺跡は、陶邑・深田遺跡（註20）にもみられるのである。

最後になったけれども、調査期間中、湖西市教育委員会教育長・牧野治平氏をはじめ、社会教育課長・井上佳男氏、担当の石田正志氏、湖西文化研究協議会会長・彦坂良平、監事の夏目武男の諸氏等に種々の便宜をはかっていただいた。ここに記して感謝の意を表わしたい。

参加者 向坂鋼二・川江秀孝・辰己均・寺田義昭・佐藤由紀男・夏目武男・吉田安吉・吉田文吉
加藤松男・加藤 明・小池庄太郎・柴田荒吉・戸田佐一・井上直文・伊藤善行

- 註1 嶋竹秋・向坂鋼二「浜名湖新居町沖湖底遺跡調査予報」『考古学ジャーナル』6128, 1976
- 註2 向坂鋼二「伊賀谷遺跡の成果」『湖西の文化』1962
- 註3 1978年総合パイロット事業の予備調査を実施したところ、最下層から弥生時代中期の土器片が、中層から上層にかけて弥生時代後期から中世の鎌倉・室町時代の土器片が出土し、かなりの長期間にわたる集落址であることが判明した。
- 註4 山村宏他「遠江の須恵器生産」『古代学研究』50号 1968
- 註5 嶋竹秋『湖西運動公園内遺跡群発掘調査概報』湖西市教育委員会 1976 3
嶋竹秋『湖西運動公園内遺跡群第2次発掘調査概報』湖西市教育委員会 1976 12
- 註6 遠江考古学研究会編『大沢・川尻古窯調査報告書』湖西市教育委員会 1966
- 註7 伊場遺跡調査会編『第4次調査月報』1～6 1971～72
- 註8 土砂採集工事によって、6～7個の土器棺が出土した。鈴木敏則君と湖西市教育委員会が遺物を保管している。
- 註9 内藤晃・市原寿文『浜名湖弁天島海底遺跡発掘調査概報』舞阪町教育委員会 1972
- 註10 向坂鋼二・嶋竹秋他「中簿遺跡発掘調査報告」『雄踏町誌』資料編5, 雄踏町教育委員会 1973
- 註11 柴田稔他『磐田市竹之内原古墳調査記録報告』磐田市教育委員会 1973
- 註12 向坂鋼二・大谷純一「袋井市発見の壺棺新例」『遠江考古学研究会会報』5 1963
- 註13 杉原荘介・大塚初重『千葉県天神前における弥生時代中期の墓址群』明治大学 1974
- 註14 杉原荘介『東日本弥生式土器文化に於ける葬礼 一上野岩櫃山の墳墓群一』日本考古学協会第5回総会研究発表要旨
- 註15 齊藤嘉彦「東海地方発見の弥生時代土器棺」『高橋遺跡』1967
- 註16 市原寿文「長者平遺跡発掘調査報告」『雄踏町誌』資料編5 雄踏町教育委員会 1973
- 註17 杉原荘介「弥生時代研究ノート」『日本農耕社会の形成』吉川弘文館 1977
- 註18 山村宏「榛原郡榛原町倉見原第3号墳調査報告」『埋蔵文化財調査報告』日本道路公団・静岡県教育委員会 1968
- 註19 彦坂良平「吉美私考」『湖西の文化』18 1968
- 註20 中村浩他『陶邑・深田』大阪府教育委員会 1968

湖西運動公園内遺跡群第3次・第4次
発掘調査概報

1978年3月31日

編集 湖西市教育委員会

発行 湖西文化研究協議会

印刷 カシロ印刷社

図版 I



(A) D地点遠景 (南より)

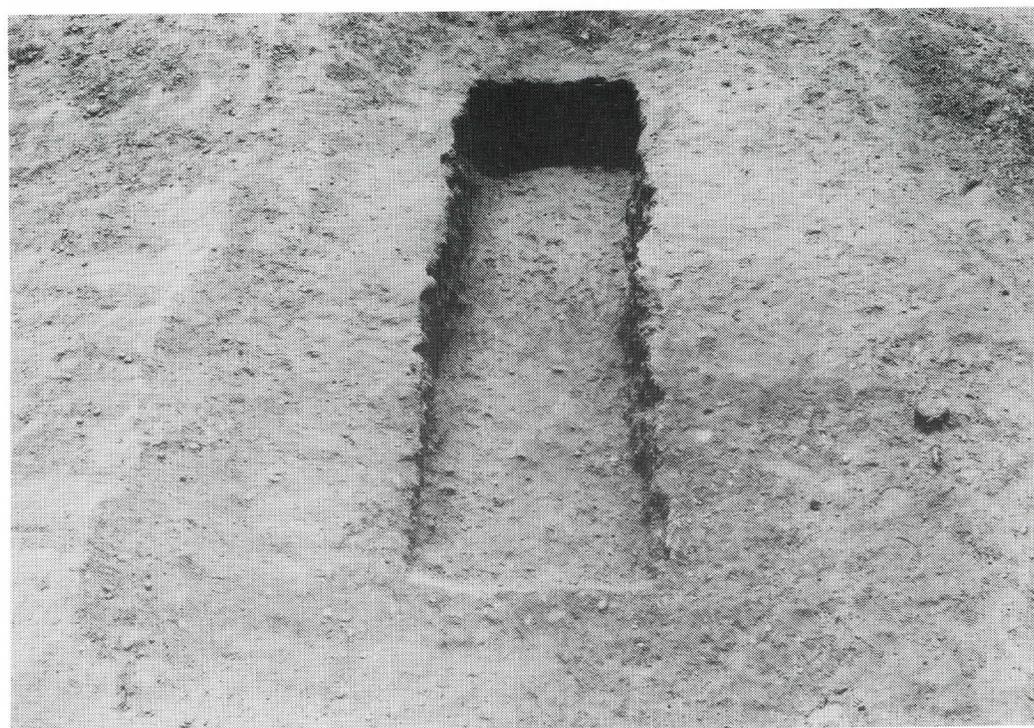


(B) 台状墓と D-2 地点遠景 (西より)

図版II

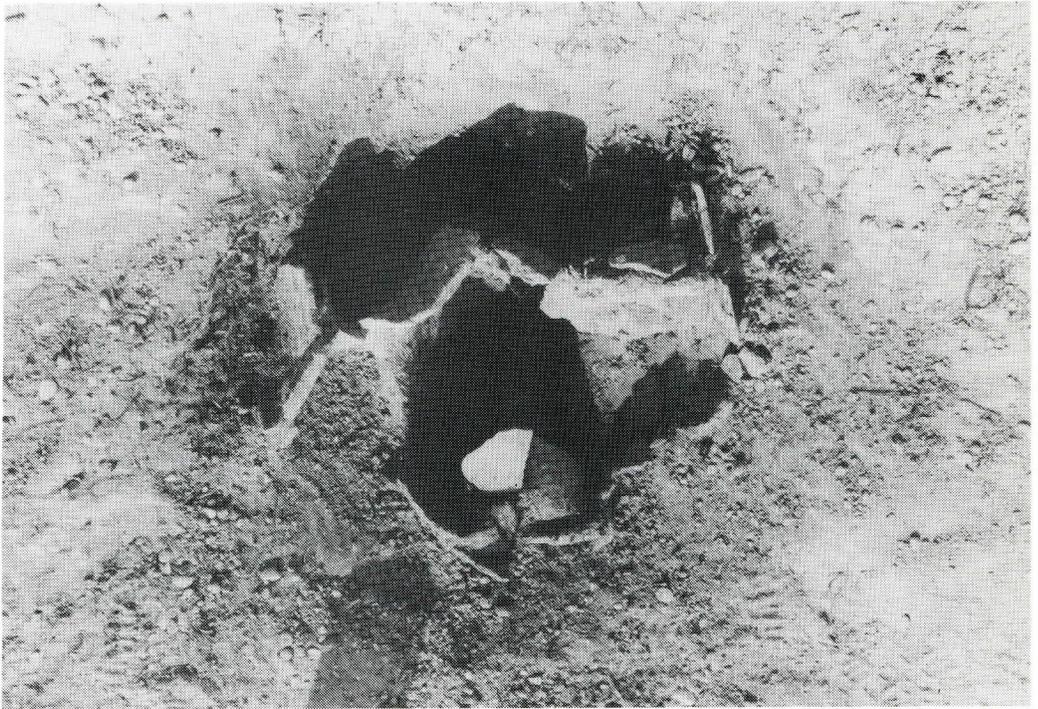


(A) 台状墓全景 (東より)



(B) 台状墓主体部 (東より)

図版Ⅲ



(A) 第1号土器棺出土状態(西より)

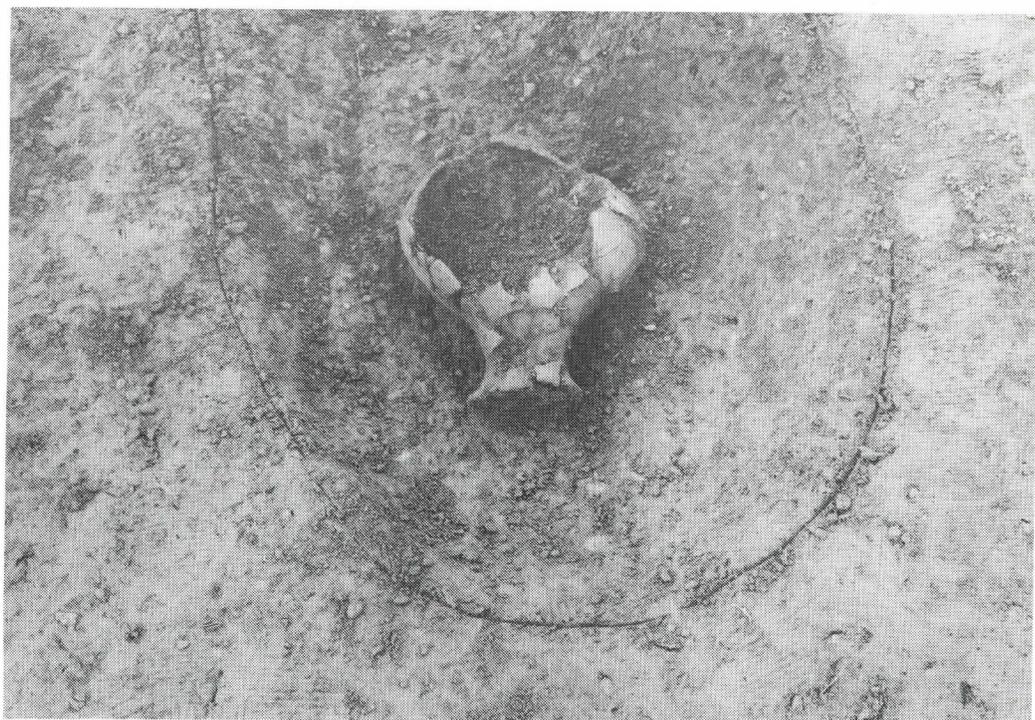


(B) D-1地点古墳時代溝内土器出土状態(東より)

図版Ⅳ



(A) D-2 地点溝遺構 (西より)



(B) 第2号土器棺出土状態 (西より)

図版 V



(A) D-3 地点土器棺出土状態 (東より)

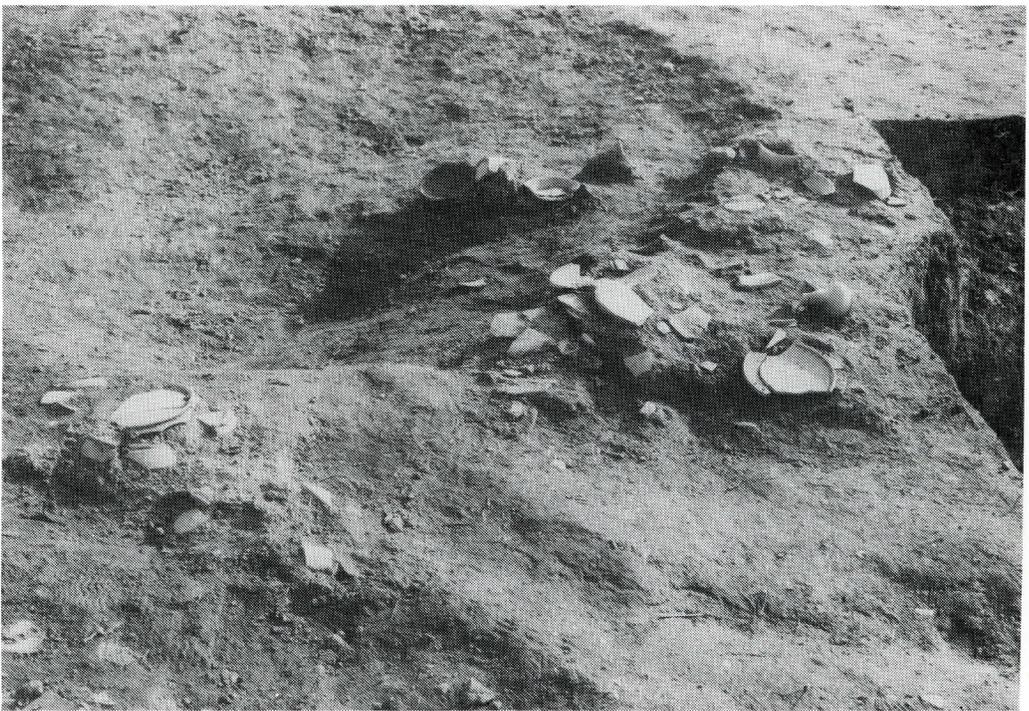


(B) D-3 地点遺構 E (東より)

図版 VI

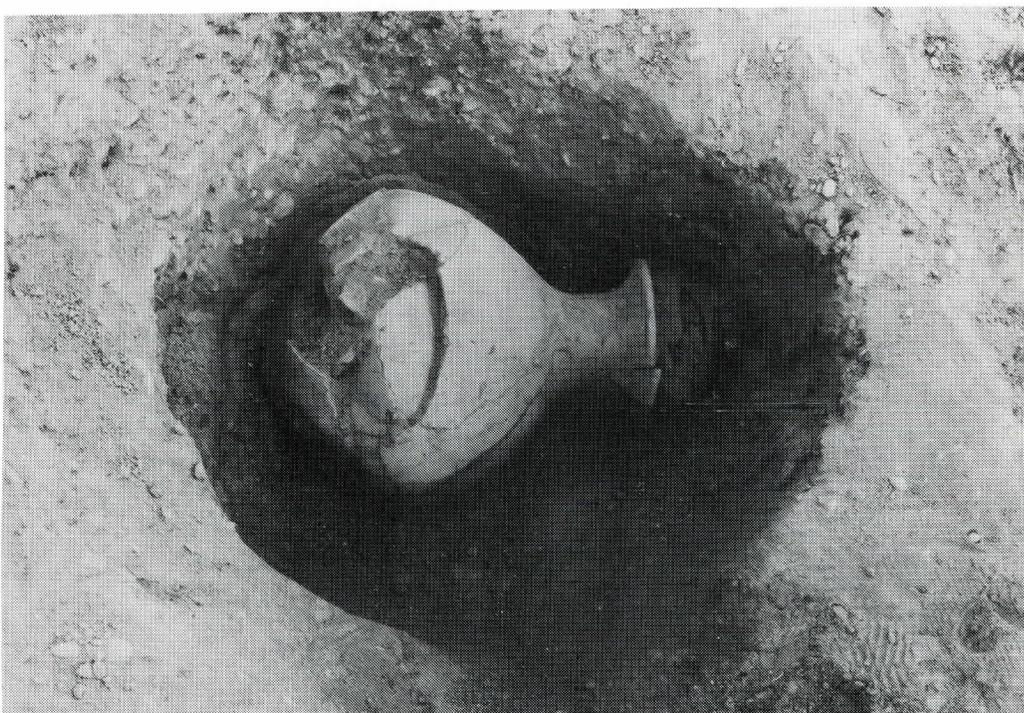


(A) D-5 地点全景 (北より)

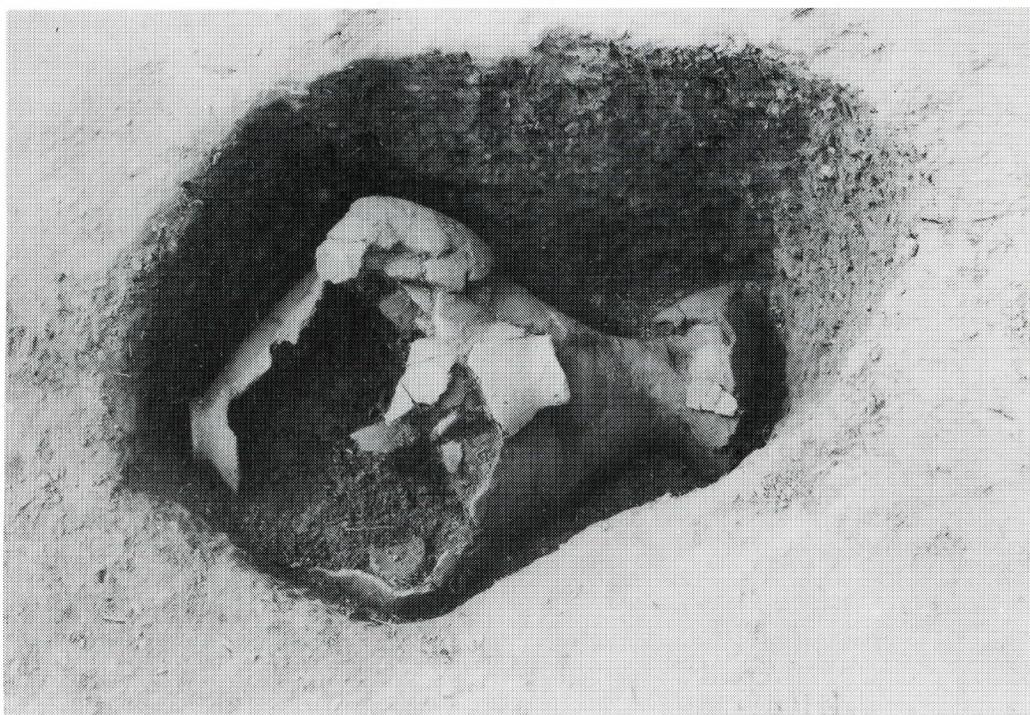


(B) D-5 地点土器出土状態 (北より)

図版Ⅶ

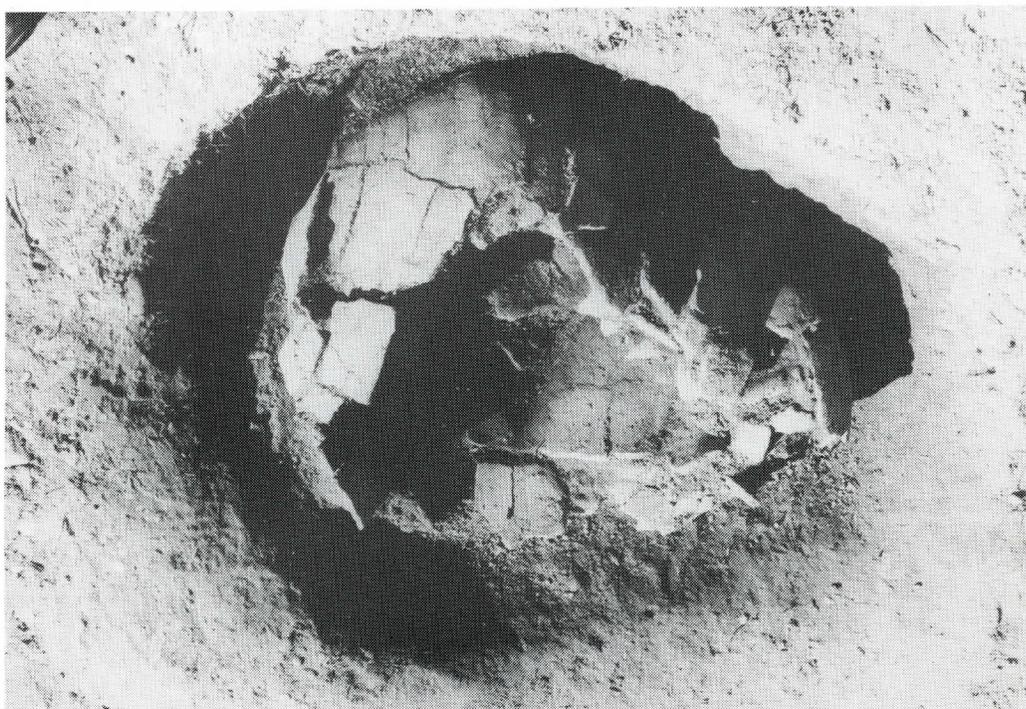


(A) 第3号土器棺出土状態(西より)

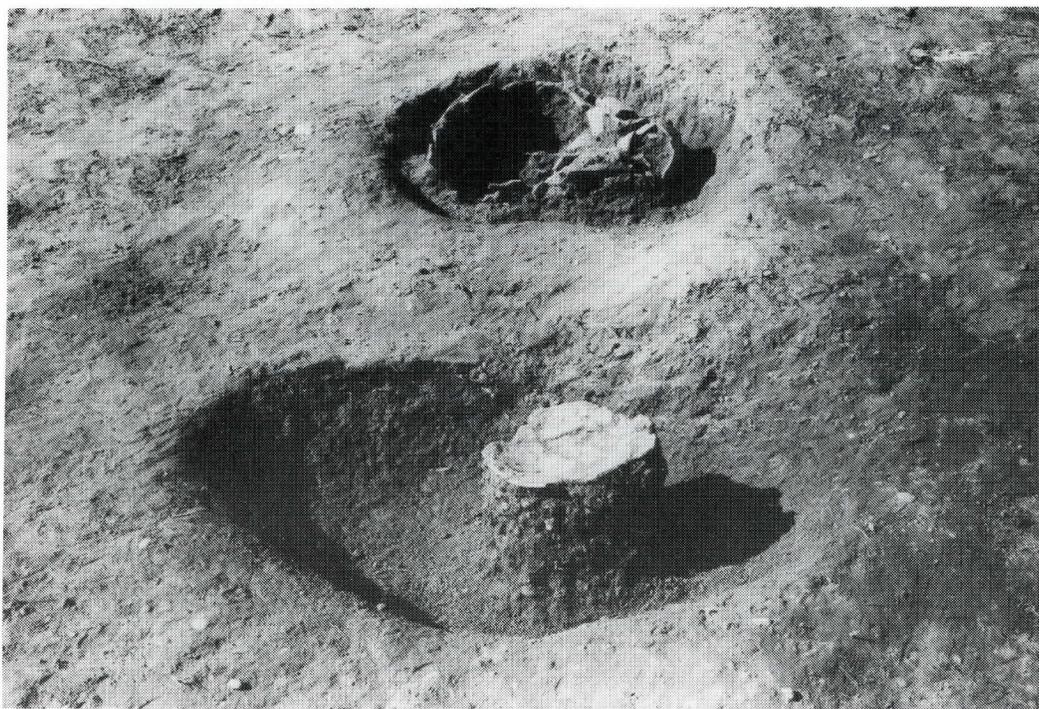


(B) 第4号土器棺出土状態(東より)

図版VIII

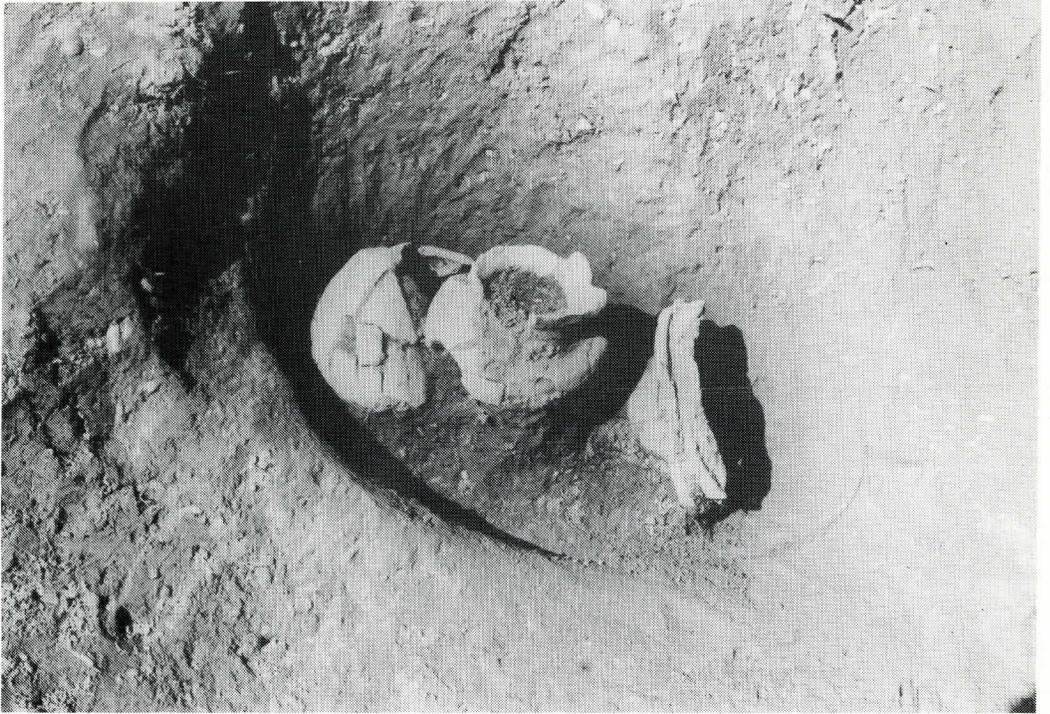


(A) 第5号土器棺出土状態(北より)

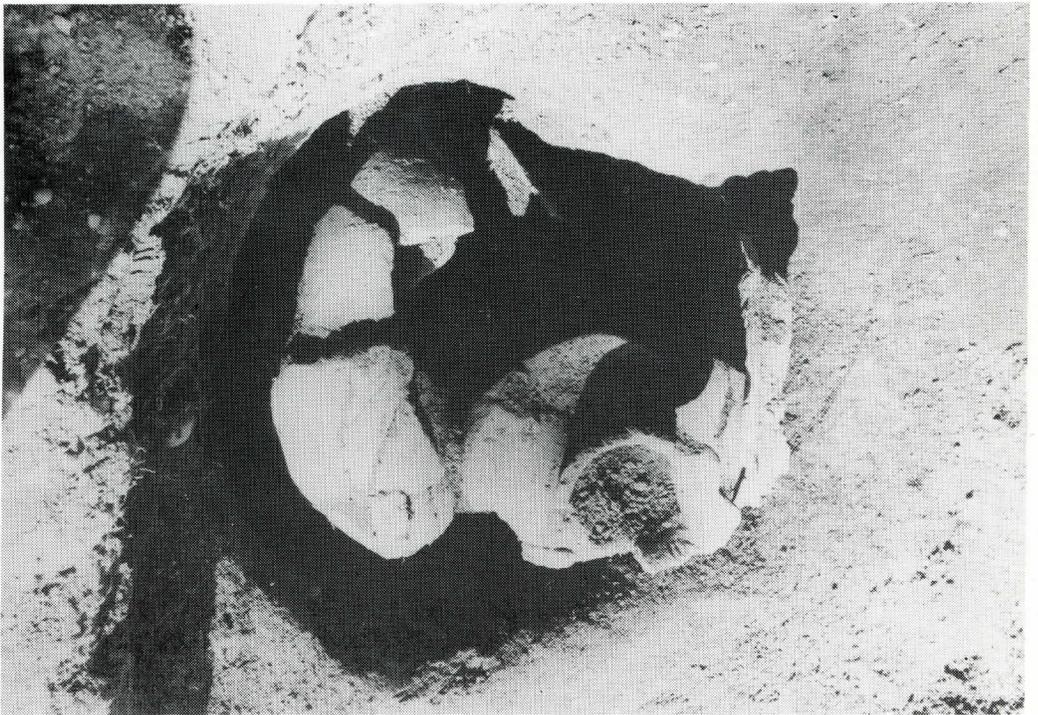


(B) 第6号土器棺出土状態(南より)

図版Ⅸ



(A) 第7号土器棺出土状態（南より）



(B) 第7号土器棺出土状態（西より）